

# 東亜同文書院をめぐる上海交通大学との共同研究と 「史実共同研究発表会」について

愛知大学東亜同文書院大学記念センター長 藤田佳久

一

霞山会から上海交通大学と東亜同文書院をめぐる共同研究をスタートさせるから日本側研究代表者になってほしいという要請を受けたのは二〇〇四年の春先であった。

その時はその主旨をまだあまり理解していたわけではなかったが、上海交通大学と東亜同文書院、それに霞山会という三つ揃いのキーワードに曳かれて承諾することになった。

おぼろげながらもその主旨は、上海交通大学が一一〇周年の校史を編纂中であり、戦後、上海交通大学に色々な面で友好協力関係を築いてきた霞山会が、上海交通大学の校史編纂の中で、かつて上海事変によって校舎を焼失した東亜同文書院大学が臨時校舎として隣接し、四川省方面へ学校を移動させた跡の上海交通大学の校舎を借用した件をめぐり、書院のその時の対応も含め、書院についての共同研究を試みたいという内

容であった。

## 二

そして、すぐの二〇〇四年四月五日には、上海交通大学の関係者と一緒にわれわれの宿泊先のホテルの会議室で第一回目の打ち合わせ会が行なわれた。

上海交通大学側の出席者は、今回のテーマの中心となる葉先生と毛先生、陳先生、それに事務局兼通訳の蔡さん、日本側は小生（藤田）と霞山会理事の星氏、それに霞山会事務局の胡さんの計七名であった。葉先生の計画では、上海交通大学側ではさらに四人のメンバーを考えているということであった。

ここでの議題と議論は、東亜同文書院については、上海交通大学からみれば、南京東亜同文書院から始まる一九〇〇年から一九三七年までは何の問題もない時期であったが、書院が上海交通大学へ移った一九三八年から閉学直後の一九四六年までが両者の接点が生じた点で議論が必要であるとのこと、また、書院が虹橋路に本格的キャンパスを開設し存続した一九一八年から一九三七年までの期間は、隣同士の関係の時期であったことも指摘され、上海交通大学は関心を示していた。

しかし、全体としては、霞山会が大きな役割を果たしてきた戦後の、とりわけ文革後の上海交通大学との友好的関係を評価し、さらにそれを発展させる構図の中での共同研究であり、書院研究を正面に据えず、それに付属する関連事項的処理というに近い位置づけが表明された。このような共同研究は上海交通大学の一部副学長の承認事項としてすすめられることも知った。この時は、まだ日中関係はややセンシティブな動きは

あったが、このような方向での共同研究が出来ること自体に筆者としては少し驚いた点と、中国の変化の進展を感じた。とりわけ、博識のある葉先生の史実を正確に把握していきたいという態度に強く敬意を表した。

具体的な議論の詰めでは、一九三八年から一九四六年の書院が上海交通大学に入っていた時期の資料を上海交通大学側は積極的に調査したいということで、北京、南京、西安（戦後一時疎開した先）、上海などの個々の場所が示され、交通大学側もその点はすでに当りをつけていることがわかれた。そして葉先生からは交通大学のスタッフに研究は自由に任せたいとの表明があった。あと、交通大学側の調査日程と計画が示され、書院の中国人卒業生への聞き取り計画も含め、学術交流をめざし、かなり具体的な調査計画が立案されていた。

### 三

第二回目は同じく二〇〇四年五月一日に交通大学で行なわれ、張副学長との面談も行なわれた。日本側は霞山会の北川理事長が中心となり、薄井さんも加わった。

同日午後、再び交通大学側との打ち合わせ会が開かれ、葉先生や前回のメンバーのほか新たに新たに盛氏も加わった。中心議題はやはり書院が交通大学へ移った問題で、それが占領なのか、侵略だったのか、書院の性格は何であったのか等につき調査をすすめたいとのことで方向が示された。

#### 四

第三回目は同年一〇月一八日に開かれ、交通大学側はわれわれの要望を受け入れてくれ、徐家匯の図書館に市内の図書館から書院関係の書籍を集め、閲覧させてくれた。遠くの図書館から市内を自転車で行くという話も聞き、有難くお礼の気持ちを述べた。ここでは全体で約一〇〇冊ほどが収集されたが、そのほとんどは愛知大学に収蔵されているものであった。しかし、一部に初見の書籍もあり、五、六冊ほどコピーの依頼を行なった。

そのあと、交通大学側から書院関係の調査計画の遂行状況の報告があり、書院に関する中国研究者への聞き取りを含め、国内の図書館調査などの報告があった。しかし、北京図書館はいくつかの理由を図書館側から挙げられ、色々手を尽したが駄目であったとの報告であった。

なお、二〇〇五年六月一二日には、上海交通大学馬德秀校務委员会主任を团长とする上海交通大学一行五名が来名され、愛知大学学長はじめ大学側五名、霞山会側四名で会食を行なった。その席上、馬氏の大学は次々と会社をつくるのではなく、研究教育が中心であるべきだという発言が印象に残っている。馬氏は中央から上海交通大学へトップとして任命されてきたことを考えると、江沢民後の新政権の考え方が表明されたとの印象を受けた。

## 五

第四回目は、二〇〇五年八月二日に愛知大学豊橋校舎で打ち合わせが行なわれた。愛知万博の見学も含め、霞山会がセットした日本旅行とあわせた形ですすめられ、愛知大学学長、副学長などとの懇親会に出席された。

交通大学の研究者は七名、日本側には馬場先生も加わった。打ち合わせ会ではその後の調査経過が報告され、交通大学側の内部にテーマ別の研究グループがつけられ、週一回の会合を持って研究をすすめていることとその成果が発表された。ただし、北京図書館はその後アプローチをくりかえしたが、やはり若干の理由で利用出来なかつたとの報告があつた。

この時期になると、お互いに顔も熟知するようになり、話もフランクにすすみ、それゆえか、筆者に対して書院に関する多くの資料閲覧の要望が出され、宿題となった。

なお、あわせて一行には東亜同文書院記念センターと図書館の霞山文庫及び中国書のコレクションを見学してもらつた。

## 六

そして第五回目が二〇〇六年一二月二日、交通大学の旧図書館一階ホールで日中双方の発表による最終報告会が開催された。この報告会は折からの日中関係の影響を受け、公式の開催については、中国政府の教育

部の許可が降りなかったとのことであったが、葉先生の力量により、上海の他大学からの出席者を交え、ホール一杯六〇人ほどの中国側参加者があり、関心の高さもうかがわれた。とくに歴史学などに関係する若い大学院生や研究職員の数がかなりみられ、熱気が漂っていた。

日本側主催者である霞山会の星理事と事務局の胡さんは、上海空港が軍事演習で閉鎖された影響を受け、午後の後半によくやく到着した。しかし、その代りを神戸学院大学の元学長で書院卒業生の倉田先生が独特の個性の語り口で参加者を魅了させ、書院卒業生の上海育ちで洗練された態度が印象的であった。

この共同研究の正式タイトルは、「史実共同研究発表会——上海交通大学と財団法人霞山会との交流史への回顧及び展望——」（胡さんの案）であり、当日の交通大学側が示してくれたタイトルは「上海交通大学・日本財団法人霞山会歴史関係研究会」であった。書院というキーワードは表面に出てこないが、霞山会がそれを包容するテーマ設定となっている。そして個別発表で書院がそのすべてで取り上げられた。

午前九時から開会し、葉敦平教授の司会で王宗光交通大学校務委員会名誉主任、倉田彪士神戸学院大学名誉教授、呉寄南上海国際問題研究所日本問題研究室主任、張聖坤交通大学国際教育学院院長・上海市人民代表大会副主任らの挨拶が続ぎ、日中間の友好を願い、折しも安倍総理大臣の中国訪問による今後の日中関係の關係改善への期待が次々と述べられた。中国側の姿勢はその点では共通していた。なお霞山会星理事の挨拶は前述した上海空港のトラブルで到着後に行なうことになった。

こうして一〇時すぎから三部にわたる発表会が開かれた。

第一部は毛杏雲教授の丁寧な司会で、発表が少し広い視点での研究が三本行なわれた。

一番目は蘇智良教授（上海師範大学）による「歴史から経験と教訓を得る」というタイトルで発表が行なわれた。蘇教授は日本にも滞在したことがあり、裏社会や慰安婦研究で知られ、筆者も面識があり、なつかしく握手を交した。

蘇教授は書院を早・中・晩の各期に分け、書院を中国用人材養成、中国革命の促進、大旅行による学生自立の教育、中国の多様な言語の修得などの点から評価した上で、歴史的事実の上に立った上での日中両国の友好が重要だと指摘した。蘇教授の発表は書院を中国のこれまでの紋切り型の評価から一歩踏み込んだ評価をされた点で注目された。

二番目は筆者が「東亜同文書院と中国研究」と題して発表した。日本側からこのような書院像を中国において発表する機会は最初であり、画期的な機会であった。葉教授と霞山会および交通大学との長年の信頼の上でこのような機会がいただけたことを深く感謝したい。

筆者の発表では書院が東亜同文会による日中の教育文化事業の一環で設置された経緯、その前史として中国留学生の東



写真1. 上海交通大学で開催された書院をめぐる研究会における来賓と発表者。

京での受け入れ、朝鮮での学校教育の普及、そして中国での学校設立などの中での存在であること、そして「大旅行」の実施過程とその記録、およびそこから読み解ける中国近代の地域像の局面、そして日中戦争の中で縮小を余儀なくされた末期の状況にも触れ、全体として書院の中国研究の成果にも触れた。いずれもよく理解してもらえよう多くの写真や図表を駆使した。

そのため、時間を少し超過し、三番目の葉教授の発表時間に食い込んでしまった。その点をお詫びしたい。

葉教授は「中日の共同歴史研究による両国民の友好促進」というタイトルで、書院をめぐる今回の史実共同研究の進展プロセスを紹介されたあと、書院と交通大学との関係を一九三八年から七年間の書院による交通大学の占拠の事実に触れられた。また霞山会と交通大学との関係の中で書院研究は十分価値があること、戦時下における日本政府と書院とを区別して見る必要があること、とくに書院学生が中国の立場を理解し、戦後も中日友好関係を発展させる力になってきたことなどを指摘され、今後の日中友好の正常化と恒常化への期待を述べられた。葉教授の発表の中にも、書院を見る目の客観性とその後の日中友好とのかかわりでの評価という新しい視点が出された。

このあと隣の交通大経営のレストランで昼食をとり、和気あいあいとした一時を過した。交通大が立派なレストラン経営をしている点に、大学経営の多元化がすすむ中国をかい間みた感じであった。

午後は二時から再開し、筆者の司会でまず四番目に日本側馬場教授による「東亜同文関係者の中国革命支援——孫中山と山田兄弟の関係を中心に——」と題した発表が行なわれた。その中で書院は日本政府に協力



的な卒業生を生んだわけではなく、その代表が孫中山を支援した山田良政と山田純三郎兄弟であるとし、良政の思想背景と孫中山への接近、惠州起義での戦死に触れ、次いで山田純三郎の孫中山支持へのプロセス、孫中山の山田兄弟への信頼の厚さなどを述べられた。

五番目は王世根教授（上海中医薬大学）による「東亜同文書院と交通大学の隣接していた期間の両学校学生関係に関する研究」と題した発表が行なわれた。この発表は、書院と交通大が隣同士存在していた一九一七年以降の時期の学生間の多面的な交流を浮かび上らせた研究で、きわめて興味深い内容であった。またこの点は従来の書院史の中ではあまり描かれてこなかった部分である。

それによれば、書院の学生と中華学生部の学生が、中国側である交通大側の学生に民主化や旅大返還の運動を誘い、書院側学生が指導的役割を果たしていたこと、そのほか五・三〇事件（一九二五）、満州事変などが日本での中国人留学生の帰国や中華学生部からの中国人学生の退学にまで発展させたが、書院学生と交通大学の学生は、最も早く抗議行動を共同で行ない、これらの運動を通じ、当時の進歩的思想（とくにマルクス主義）が書院から交通大へ浸透したこと、一九二五年に徐家匯に中国共産党の支部が結成されたが、その中心は書院の中華学生部学生と日本人学生とによるもので、のちに交通大学に支部が独立して誕生することにもなったこと、などを述べられた。また、書院の運動会が名物であり、多くの人に知られていたことにも触れられた。

六番目は日本側の薄井さん（長野県）が「東亜同文書院卒業生ヒアリング調査」と題して発表され、二五期生で雲南からビルマへ大旅行を行なった安澤氏の経験談の聞き取りを紹介され、あわせて書院における書

院生の共産党へのアクセスの動きを簡潔に述べられた。

七番目は毛杏雲教授（上海交通大学校史編集委員会秘書長）が「彼らは中日友好のために奔走した」と題して発表された。

そこでは書院卒業生と交通大との戦後の交流の中で、戦時中、書院が交通大学を占拠した中で学業を続けながら日本の軍国主義に批判的であったこと、中国への限らない親しみを持っていること、中国の改革開放への強い協力を果たしたことを示し、戦後、交通大学のかわりを持った書院卒業生への評価を行なった。なお、その際、聞き取り相手として、宮家、秋岡、倉田（当日出席）、前田、吉川、北川（霞山会理事長）の日本人卒業生諸氏と梅、高、陳、王など中国人側卒業生諸氏が紹介され、書院と交通大との戦後の交流史が人物中心に取り上げられ新鮮で説得的であった。



写真2. 当日の発表会場（交通大旧図書館一階）。  
手前のメインテーブルからみた中央に陣取った参加者たち。60人あまりが出席した。

八番目は陳泓教授（上海交通大学校史研究室主任）が「霞山会、東亜同文書院の学生と上海交通大学との友好交流に関する略述」と題して発表が行なわれた。

ここでは今度は霞山会との交流に焦点が置かれ、具体的な学生交流事業、霞山会五〇周年記念時の交流事業、国際学会開催時の相互協力、科学技術をめぐる協力交流など、中国の発展の中での交通大の発展プロセスを支援する形での霞山会の重要な協力交流が順次紹介された。そんな中でも愛知大学卒業の吉川信夫氏による交通大での日本語教育など献身的な協力交流も指摘された。

そして、丁度この発表が終了しかけた頃、霞山会星理事長と胡氏が会場へ到着し、この発表のあと星理事長から挨拶が行なわれた。

このあと隣接する別室で休憩がとられ、落ち着いた和気あるティータイムとなった。

そして最後の第三セクションに入った。座長は前掲陳教授である。この第三セクションはいずれも上海交通大校史研究室に属する若い研究者達の発表で、書院をめぐる事実関係を明らかにしようとする発表であった。

まず九番目は盛懿助教授による「東亜同文書院の交通大学キャンパス占用に関する考察」と題して発表が行なわれた。

そこでは日中戦争下、日本軍飛行機が空を飛ぶようになり、交通大は危険を感じて重慶などへ移り、現地で校舎を借りて授業を再開したこと、そのあと日本憲兵隊が交通大のキャンパスを占拠し、そのあと書院がそこへ入ったが、交通大との間には賃借の関係はなかったこと、書院は交通大キャンパス内の建物を改修

し、銅像を壊したこと、一九四五年、終戦前に交通大は教育部へ校舎返還を求めたが無駄であったこと、それが終戦になり書院が撤退したことにより、交通大は元のキャンパスへ戻れたこと、など具体的事実経過を發表された。

一〇番目は孫萍氏の「一九三七年〜一九四五年東亜同文書院の旅行に関する研究」と題する發表が行なわれた。

その中で、書院生の「大旅行」は四〇年間にわたり延五〇〇〇人の学生による七〇〇コースの大旅行で、三二冊もの旅行記が刊行されるなど重視されてよい成果であるとした上で、中国の学術界から近年評価がみられるようになりつつあること、交通大占用時の一九三七年〜一九四五年の「大旅行」については、旅行指導が制度化され、規範化され、日本政府の目的と関係を強めたとして、外務省文化事業部や軍部への報告書提出、日本七三部隊の通行証をもっていたことを三五期小泉氏の発言から裏付けたとした。そして戦時下の資料提供は現地日本人からのみとなり、期間も一ヶ月へ縮小したことを何人かの書院卒業生から聞き取ったとした。それだけに一九三七年からの「大旅行」は、近代中日関係の複雑な様相を示したものであるとした。

最後の一一番目は欧七斤氏の「東亜同文書院の中国方面の研究に関する概要」と題しての發表が行なわれた。

ここでは中国側の書院研究の動きが紹介され、一九九〇年代から始まっているがまだ初歩的な段階にあるとした上で、一九〇〇年から一九三一年までの書院と東亜同文会と中国とは、清末に高官が書院設立に協力し

たり、魯迅や胡適が書院で講演をしたこと、また民国政府も書院生の「大旅行」にビザを発行したりして良好な関係にあったこと、一九六〇年代に刊行された中国人関係者の記録では書院が多くの貴重な記録を残してくれたこと、また、外務省管轄の特殊組織としてみなしていたことがあった。現在までに中国人研究者による若干の書院研究があり、個別的にみると、東亜同文会を政治的団体と位置づけたり、書院の卒業生は評価出来るが、書院は中国の侵略を意図したとしたり、また書院の歴史的評価としては、日本人による中国学の基礎をつくり、日中国民の交流に役割を果し、中国革命を支援し、大旅行で貴重な資料を残したとする研究もあるとして、中日戦争以前は概して中国政府と書院は良好であったとする研究などがある。また大旅行の調査はそれなりの評価はあるが、時期により評価は異なること、中国語教育や商業調査はかなり肯定的にとらえられていること、などが紹介され、今後、研究資料収集につとめたいと結ばれた。

このように書院をめぐる中国側研究者による研究紹介があったこともきわめて新鮮で、まだ初歩段階とはいえ中国側の研究視点がうかがわれた点で貴重であった。

すべての発表が終了したあと、若干質疑の時間があり、日本側馬場教授から、孫氏の発表の中にあつた戦時下の書院卒業生が特務機関に従事したからスパイ行為をしたとする指摘に対して、「特務機関」の意味は、中国語ではスパイ活動だが、日本語では民生安定化などの目的であり、内容が違っているので、中国語で解釈するのは間違いだとの指摘があつた。研究会後も馬場教授と孫氏は親しく議論しており、共通理解に達したのではないかと推測した。

以上が終了して夕刻六時すぎ、閉会式が行なわれ、筆者と葉教授がそれぞれにお礼の言葉を述べたあと、

霞山会の星理事がお互いの議論をぶつけ合い、その上で相互の考え方を理解できれば日中間の友好へもつながるのであり、とくに若い人達にそれを期待し、日中友好をさらにすすめて欲しいとの感想が述べられ、研究会としては盛況で成功裡に終了したといえる。若い学徒もかなり出席し、最後まで長時間熱心に発表を聞いていたことは、この書院問題への関心があつたという新しい雰囲気を感じた。

今後、中国側の研究をサポートし、また、日本側も中国側からサポートしてもらいながら、相互に研究が深まることを期待したい。最後の懇親会はそんな雰囲気満ちていたことを報告し、三年間にわたった日中間での書院研究を総括しておきたい。

なお、最後にもう一点付記すれば、上海交通大学側は中国側で見出した書院関係の文書、新聞記事などをまとめて一冊の資料集として刊行された。これをまとめる努力を払われたことに敬意を表し、これが今後の書院研究への貴重な一里塚になることを確信した。

## 七

最後に、わずか三年間ではあつたが、このような企画とその実現を行ない、われわれにこのような機会を与えていただいた霞山会北川前理事長、星理事、胡事務局担当の方々、また上海交通大学ではとりわけ経験豊かで器量の大きい葉敦平教授、そしていつも笑顔で最高の雰囲気をつくっていただいた毛杏雲教授には厚くお礼申し上げます。また両教授を支えられた交通大学の陳泓教授をはじめ盛懿、欧七斤、孫萍の諸氏にも厚くお礼申し上げます、今後も相互に研究を深めていけることを期待したい。